

「非常口ピクトグラフ」誕生の背景について

なぜ「非常口」という文字表記から、絵文字(ピクトグラフ)に変わったのか？

以前避難誘導標識に使用されていた「非常口」の文字は、薄い煙の中でも見えなくなることがわかり、この問題を解決するためには、もっと単純な文字、出来れば単純なピクトグラフ表示にすべきだと判断。さらに漢字を読めない子供や外国人にも非常口の場所を示すのに役立つという観点から、1982年1月20日の消防庁告示により避難誘導標識の表示面が「非常口」の文字から人の走っている絵文字(ピクトグラフ)に変わることになった。

ピクトグラフを使用した避難誘導標識の新表示面デザインが生まれるまで

1978年10月、ピクトグラフを一般公募(応募数3,337点)。避難誘導標識表示面のピクトグラフは遠くからでもよく見えること、子供や外国人でも一見して非常口を示していると理解できることを基準に、次の5種類のテストを実施した。

①図形の粗さについての選別 ②デザイン評価 ③一般人による選好度試験 ④通常照明下での見え方試験 ⑤煙中での見え方試験

これらのテスト結果を集計し、最高点を得たものを入選作として消防庁に提出。消防庁は1982年1月に現在のピクトグラフを非常口のシンボルマークとして採用した。

「非常口」という文字表記からピクトグラフへ変更したことによる効果

ピクトグラフの採用によって、漢字の読めない子供や外国人にも一見して非常口の場所が把握できるようになり、火災等の災害時の敏速な避難が可能になったものと考えられる。

また、消防庁告示から1年半の間で既存の誘導灯の表示パネルを含め70%以上が文字表示からピクトグラフに自主的に交換したことから、文字表記の時には建物内で意匠的に不釣り合いだと非難されてきた避難誘導標識の表示面への批判をピクトグラフが解消することになったと考えられる。

日本の非常口ピクトグラフがISOに採用され世界のピクトグラフになるまで

日本の非常口ピクトグラフを世界のピクトグラフにするべくISO(国際標準化機構)事務局に提案しようとした矢先、ISOで当時審議されていたピクトグラフを入手。ISO原案は日本案と非常によく似ていたため、急遽日本案とISO原案との見え方についての比較実験を実施した。

その結果、日本案のピクトグラフは ISO 原案のピクトグラフより通常の照明下で約 20%、煙中で 10% 見え方が良いことが判明。

そして 1980 年 5 月、パリにある ISO 事務局へピクトグラフの日本案が出来るまでのテストの過程、日本案と ISO 原案の見え方の比較実験の結果に関するデータを送付し、ISO 原案を日本案に差し替えるよう申し入れた。

しかし 1981 年 7 月、非常口のピクトグラフを含めた消防用安全標識原案(DIS6309)の書類とこれらの安全標識を国際規格として認めるかどうかの投票用紙に載せられていたのは、ソ連(当時)が作成した ISO 原案のままのピクトグラフであり、日本としては当然のことながら不賛成の投票をした。

投票の結果、賛成が 71%であったが、重要なコメントが幾つかあったので見直しをすることになり、1982 年 4 月、安全標識の見直しについての作業部会がロンドンで、さらに 1983 年 3 月、オスローで引き続き会議が開かれた。

そして、1984 年 12 月。

パリで安全標識に関して最終の見直し会議が行われ、その場で、日本案のピクトグラフについて、一般から応募した 3,337 点のピクトグラフを 5 種類の科学的なテストを実施し入選作を決めた経過、及び日本案と ISO 原案との見え方の比較テストの結果を、それぞれデータをもとに説明した。

説明後、議長から「そこまで科学的なテストを実施し決めた日本案は素晴らしい。委員の皆さん、日本案を採用して問題はないですね」との発言があり、拍手で日本のピクトグラフが正式に ISO 案となった。

その結果、1985 年 10 月、消防用安全標識原案(DIS6309.2)に対する再投票が行われ、今度は日本も賛成投票した。そして 1987 年 8 月、日本提案の非常口を示すピクトグラフが国際規格となったのである。

出典：神 忠久：誘導灯表示面のピクトグラフについて、日本火災学会誌 Vol.57
No.6,p.38-43,2007.12

(神 忠久所属)早稲田大学理工学術院総合研究所